

【147】

氏名(本籍)	黄順姫 (韓国)
学位の種類	社会学博士
学位記番号	博乙第618号
学位授与年月日	平成2年9月30日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
審査研究科	社会科学研究科
学位論文題目	文化としての学歴
主査	筑波大学教授 副 田 義 也
副査	筑波大学教授 佐 藤 守 弘
副査	筑波大学教授 岩 瀬 庸 理

論 文 の 要 旨

本論文は、学歴を文化の一形態とみて、文化としての学歴にかんする社会学理論を構成し、これにもとづき、高等学校の学校文化を実証的に調査・研究し、社会学の学歴研究に多くの独創的貢献をおこなっている。日本の社会学における学歴研究は1950年代からはじまるが、それは主要には社会階層論的文脈のなかでおこなわれ、父親の職業階層が子どもの学歴にどう影響するか、また、子どもの学歴がかれの職業階層にどう影響するかに関心の焦点をおくものであった。これにたいして、近年、学歴を文化としてとらえなおし、生徒や学生が、学校のなかで、自らの資質や性格を主体的にはたらかせながら、創出し共有してゆくものであり、それがかれらを、ほかの学校の生徒や学生にたいして特徴づけるという考え方があたらしくあらわれてきた。本論文は、わが国の社会学における、この新傾向にもとづく最初の本格的・体系的な学術的達成である。論文の全体は、理論的考察をおこなう第1部、実証的分析をおこなう第2部、および附章から成っている。

第1部「文化としての学歴に関する理論研究」には、第1章「文化の共有としての学歴の形成過程」がおさめられている。著者はそこで、フランスの社会学者、ピエール・ブルデューのハビトゥス (habitus) の概念を主要な道具としてえらび、ブルデューやかれの影響をうけた日本の社会学者たち、宮島喬、秋永雄一などの所説を参考にしつつ、文化としての学歴にかんする総合的な社会学理論を構成している。これは、家族のなかに誕生した子どもが家族の文化によって社会化され、そのハビトゥスを形成され、のち、学校に入って学校文化に出会い、これを共有、再生産しつつ学歴を形成する過程の理論である。この過程において、家族の文化は家族員の教養や言語習慣などであり、文化的資本としてとらえられる。社会化は、この文化的資本が子どもに身体化されることである。学校への入学、適応にとっても、文化的資本はつよい影響力をもっている。家族の文化と学校文化が連続的であれば、子どもの学校への適応は容易であるが、両様の文化が異質であれば、その適応は困難にな

り、かれのハビトゥスが修正されることもある。

第2部「文化としての学歴に関する調査研究」は四つの章をおさめている。第1章「家族の文化による学校生活への適応過程——高等学校段階における事例を通して——」は、F県のK大学の学生、大学院生16名を対象に長時間インタビューをおこない、かれらの出身高等学校の学校文化、そこでの適応様式を回顧、熟考、報告させてデータを入手し、これを分析したものである。その結果、文化的資本の蓄積が大きく、学校文化に類似したハビトゥスをもつ人びとは、学校によりよく適応すること、さらに大学進学にさいして特定の学部への選好、意味付与は、家族の文化財やハビトゥスの影響下にあることがあきらかにされている。この章での事例分析はいますこしくわしい記述が望まれる部分もあるが、それは結論の妥当性を損ねるほどのものではない。

第2章「ハビトゥスの変容による学校文化の共有」は、F県の県立S高等学校の生徒と教師を対象にした大量観察調査と事例調査および学校行事での参与観察調査でえたデータを分析したものである。S高等学校は藩校以来二百年の歴史をもち、進学校ではあるが、自主、自由の校風で知られる。大量観察は、第1回目は720名、第2回目は300名の生徒を対象にしたものであり、事例調査は18名の教師、生徒にたいする長期にわたるインタビューであった。その結果、生徒たちはハビトゥスの特性によって4つの類型にわけられ、各類型は学校への適応で成功の程度が異なることがあきらかにされた。この学校では、高等学校を大学進学のための手段とみないで、それ自体の生活を享受する場であるとみて、勉学と学校行事を自律的におこなう文化がある。その文化と同質のハビトゥスを有する生徒たちは、自らの文化を強化しつつ適応している。

第3章「学校文化の共有に関する比較研究——人文系高等学校を中心として——」は、前記のS高等学校と、F県の私立F高等学校とのあいだで、生徒の学校文化の共有過程を比較分析したものである。F高等学校は、大学受験のための準備教育を徹底しておこない、高等学校を大学進学のための手段とみなす文化をもっている。その生徒310名を対象に大量観察調査をおこない入手されたデータが、S高等学校の生徒にたいする2回目の調査のデータと比較分析された。両校で、生徒はそれぞれに規範化された学校文化に準拠して、かれらのハビトゥスを強化したり、変革していく過程があきらかにされた。学校文化と連続的な家族の文化のもとで社会化された生徒たちは、いわば自然体で学校に適応する。要求される変革がうまくゆかないときは、生徒たちは精神的圧迫、文化的劣等感などの象徴的暴力を経験することになる。この暴力は、ハビトゥスの変革を促進する機能をはたす。

第4章「ハビトゥス戦略による学校文化の再生産過程」は、S高等学校における生徒たち、教師たちのハビトゥス戦略による学校文化の再生産過程を解明している。使用されているデータは、すでに紹介した大量観察調査、事例調査、参与観察調査などでえられたものである。ハビトゥス戦略は、儀礼的行事、神話、時間・年令、建築空間などによる象徴的戦略と、対生徒、対教師、対後援者などの対人戦略にわかれる。S高等学校の学校文化は、管理教育・受験教育を重視する校長や教員の転入、大学入試制度の変化、受験戦争の激化などによって、変質の徴候をみせつつある。これにたいして、その学校文化を規範化した生徒たち、教師たちは危機感をもち、変質の徴候と象徴的に闘争しながら、若干の修正をあえてして、自らの学校文化を生き残らせようと努力する。著者はその過程をハビ

トックス戦略の概念によって、精緻に叙述・分析している。この章は高い完成度とつよい説得力をもち、本論文の白眉をなす出来栄を示している。

附章「文化としての学歴の社会的機能」は、文化としての学歴が職業経歴におよぼす機能についての理論的考察をおこなったものである。

審 査 の 要 旨

冒頭にわずかに述べたが、本論文は、わが国の社会学における、文化としての学歴を主題とした最初の本格的、体系的な学術的達成である。これは、学歴の社会学的研究に多くの貢献をおこなっている。その主要な部分は次の5つである。(1) 学歴を文化の一形態とみなし、家族の文化と学校文化のもとで人びとが社会化される過程を分析的・総合的に把握するための枠組みを構築した。(2) 家族の文化と学校文化の連続性、不連続性が、人びとの学校生活への適応、学歴形成におよぼす影響を多面的にあきらかにした。(3) 自主、自由の校風で知られるS高等学校のばあい、家族の文化的資本が子どもに身体化されて、その適応を促進したり、阻害したりする過程を、実証的に解明した。(4) 高等学校生活自体を目的とし生徒の自律性を重視するS高等学校と、高等学校は大学受験の手段であるとして管理教育を徹底しておこなうF高等学校のそれぞれで、生徒が学校文化を共有する過程を比較分析して、ハビトックスの変革経路をとらえた。(5) 管理教育が押し進められ、受験競争が激化する今日の教育状況のなかで、S高等学校において、自主、自由の校風を規範化した、生徒たち、教師たちが、ハビトックス戦略をとって、象徴闘争をおこない、学校文化の再生産をおこなう過程を分析し、透徹した理解を提示した。

なお、著者は本論文を日本語で書いたが、その日本語はほとんど完璧で、われわれ読み手は、これを読みつつ、著者の母国語が日本語ではないということをまったく意識することがない。また、本論文の文体は、社会学論文のそれとして平明、明晰、かつ格調が高く、最高度の出来栄を示している。

よって、著者は社会学博士の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。